

黒龍江省視察報告

ERINA 調査研究部研究員
南川高範

7月28日から8月4日の1週間をかけて、黒龍江省ハルビン、綏化、大慶の市場概況の把握を目的として視察を行った。2015年時点の各地域の情報を概観すると、人口はハルビンが最も多く961.4万人、続いて綏化が548.5万人、大慶が244.5万人である。一方、一人当たり付加価値生産で見た所得水準は大慶が最も高く1万6209ドルであり、これはハンガリー、ポーランドなど一部の東欧諸国よりも高い水準である。ハルビンは8690ドルで、中国の平均値と同程度、綏化は3400ドルで平均よりも下位に位置する地域である。一方で経済の勢いを意味する経済成長率は、ハルビンが7.1%、綏化が6.5%と中国の平均並みであるのに対して、大慶は-2.3%とマイナス成長であることを示している。

今回対象としたハルビン、綏化、大慶はそれぞれに異なる特徴を持つ地域であり、その特徴それぞれが黒龍江省の重要な側面を表す。ハルビンは対ロシア経済の重要な拠点地域であり、綏化は農業の生産地、大慶は油田を擁する工業都市である。

今回の視察の中で話を聞くことができた黒龍江省社会科学院北東アジア研究所の笹所長によると、黒龍江省の特徴は以下の4つの特徴に分けられるという。一つ目は農業地帯である点、二つ目は旧工業だけでなく先端技術(中国語で高新技術)

も含む工業地域であるという点、三つ目は対ロシアの重要拠点であるという点であり、四つ目は人材育成の拠点である点だと説明する。綏化市だけでなく、五常や三江平原とよばれる米作地帯が黒龍江省には所在しており、五常大米、響水大米と呼ばれるブランド米が生産されている。綏化市も米作が盛んな地域ではあるものの、ロシアなどとの対外取引において、他の地域に比べて立地などの点で不利であるため、農業を利用した発展が見込めないという。また、黒龍江省の特徴として、人材育成を重視している点を挙げている。黒龍江省は省当りの大学の数が多く、工業大学などでロボットや自動車に搭載される先端技術の開発が盛んに行われているのだという。しかし、旧工業が生産の多くを占める黒龍江省の特徴から、先端技術が生産性の上昇、広義のイノベーションにつながらないことが、黒龍江省が直面している課題であるとも指摘している。

こうした特徴をもつ黒龍江省であるが、上述の通り、黒龍江省すべての地域が一樣に4つの特徴を持つわけではなく、今回訪れた都市はそれぞれにその都市の特徴を持っている。綏化市には、ハルビンで見られるようなロシア語の看板や、ロシア商品の販売店など“ロシア的”な要素がない。前述の笹所長の話では、黒龍江省の特定の地域でロシア文化が色濃く反映

される要素は、ロシアとの貿易であり、ロシアとの取引を扱う税関のある都市でなければ、街中でロシア製品を販売する商品などが見られるわけではないという。

ハルビン市内でロシア商品を販売する商店



(出所) 筆者撮影

また、所得水準を反映して、販売されている財貨の価格は、大慶、ハルビン、綏化の順に高いたらうと考えていたが、必ずしも商品価格がその地域の所得水準を反映しているわけではないことも確認できた。衣服や食品、家電製品について、価格を見たところ、高級品の価格、低所得層向けの価格、いずれについても、三都市で大きな差がないのである。この理由として二つの要素が考えられる。一つは、所得水準の低い綏化市で高所得層が全体の一部であっても、人口数が多いため、そうした高所得層だけを対象にした販売店が継続的に営業を行うことができているという考え方である。もう一つは、競争の

不完備である。綏化では、商城とよばれる大型のスーパーマーケットのような販売店が散在しており、それぞれのスーパーマーケット間に距離があるため、十分な競争が行われていない可能性がある。実際、ハルビンの中央大街や、大慶の崑崙大街などの商業地域では、同じ地域に商業施設が集中し、また一つのショッピングセンターの中でも同種の商品を販売する店舗が出店しているため、その中で競争の仕組みを働かせていると考えられる。

ショッピングセンターが集中する大慶の崑崙大街



(出所) 筆者撮影

また、ハルビン市から綏化市へ移動する際に、交通機関として普通列車を利用したのだが、車両からデッキに至るまで人が満載で、明らかな超過需要の状態で行っていた。満員電車は日本でも珍しく

ない光景ではあるが、中国の列車はすべて事前に販売するチケットの数が決まっており、身分証を提示して列車に乗るような仕組みになっているため、チケット販売数や価格が明らかに許容量を上回ることを前提としていることになる。便数の増加や価格の引き上げなど、本来の市場の仕組みによる需給の調整は行われていないことになる。

ハルビンから綏化へ移動する際の満員列車の風景



(出所) 筆者撮影

一般的な小売商店の商品価格には大きな差は見られなかったものの、三都市すべてに所在するケンタッキーフライドチキン(中国語で肯德基)の価格を見たところ、三都市に所在する店舗で提供している商品の価格差は、経済成長率から推測される需要の勢いや所得水準など直観的な

予想と整合的であった。例を挙げると、オリジナルチキンの価格はハルビンで12元、綏化で10元、大慶で10.5元であり、どの都市でもオリジナルチキンとポテトMサイズのセット価格は同じである。チキナゲットの価格はハルビンで11元、綏化で9元、大慶で9.5元と、どの商品の価格もハルビンが最も高く、綏化が最も安く設定されていた。一方で、大慶とハルビンに所在するスターバックスの商品は、いずれの店舗の商品価格も同じであることを確認した。

最後に、綏化市では、団地のような集合住宅の階下で、親子孫三代が語らう風景や、バスの運転士が客と笑い合いながら話をする、そうした光景を目にした。経済学的な見地からは、安定的かつ平等に経済発展を遂げ、それが社会の平穏につながるものであるかどうか政策評価などにおける一つの指標となる。しかし、経済発展に伴い、豊かな時間や心のゆとりというものが失われていく傾向にもある。経済発展に伴い時間当たりの賃金が上昇し、労働に使わないゆとりある時間の機会費用が高くなることが理由の一つと考えられるが、経済学以外の見地からは、こうした豊かな時間の欠失は、社会的厚生の下を伴うとみなされるのかもしれない。

¹ アレクセイ・マステパノフ『「2035年までのロシアのエネルギー戦略」草案の運命』、ERINA REPORT (PLUS) No.137、2017年8月